井伏文学における旅

―昭和三十年代後半の作品を中心に―

赤井恵子

はじめに

昭和三十一年から三十五年二月にかけての井伏鱒二の発表作品を概観してみると、まず中心的な長篇として、「駅前旅館」（昭和三十一年九月～三十二年九月、『新潮』に連載）と、「珍品堂主人」（昭和三十四年一月～九月、『中央公論』に連載）とがある。そして、この時期には、やがて『七つの街道』（昭和三十二年十一月）、『釣師・釣場』（昭和三十五年二月）、『取材旅行』（昭和三十六年九月）などの単行本に収められることとなる紀行文、見聞記などが次々に発表されている。

この五年間の井伏文学の動向においては、〈旅〉というモチーフの存在が、特徴として挙げられよう。たとえば、「駅前旅館」には、その題が示すように、ある旅館の番頭が主人公となって登場する。また「珍品堂主人」においても、主人公が温泉旅館の支配人を経験している人物であったり、のち携わった料理屋稼業の中でも、食器の注文に旅立つようなことがあったり、というように、〈旅〉のモチーフは、断片的ながら、存在している。

作家自身が、この時期には、他の年次には見られないほど、よく旅行に出かけている。昭和三十一年春から翌年の春にかけての幾度かの旅行から生み出された紀行文が『七つの街道』にまとめられる。また、『釣師・釣場』は、三十三年春から翌年春にかけての旅行が、『取材旅行』は、三十四年から三十五年にかけての旅行が、それぞれ題材となっている。作家の内部に、〈旅〉のモチーフが占めていた比重はかなり大きい、と言えよう。

そこで私は、この時期の井伏文学における〈旅〉のあり方を、「駅前旅館」を中心に探ってみたいと思う。この数年間に特に集中してうかがえる〈旅〉への執着が、どのような特徴を持ち、また、井伏文学全体の中にどのように位置付けられるかを考えてゆきたい。

〈旅〉への執着が、井伏文学の特徴の一つであることは、すでに小沼丹氏の論考[注1]に詳しい。小沼氏は、「井伏文学を構成する要素」として、「一つは旅行、一つは豪快な旅行を好まぬ庶民的精神」を指摘しており、作家の「旅行好きに深く根を降した産物」として、「集金旅行」、「駅前旅館」、「七つの街道」などの作品名を挙げている。

〈旅〉と同じ範疇に入る〈漂流〉も、また井伏文学の一大特色であり、漂流記物に関する論及はすでに多い。

が、とりあえず私は、〈漂流〉よりは日常的な次元にある〈旅〉が描かれた作品を取り上げてみたい。具体的な手続きとしては、まず「駅前旅館」へのアプローチを行ない、その後、その他の〈旅〉が描かれた作品の精査を試みたい。

一　「駅前旅館」

作品「駅前旅館」には、番頭たち、すなわち、旅する者を受け入れる立場にある者が、クローズ・アップされて描かれている。

この作品には、生野次平という一番頭が語り手として登場する。次平は、昔ながらの番頭気質を保ち、それを誇りにし、たのみとしている。が、反面、今後番頭を続けていくことが「こころぼそ鳥遏山」であるとも感じている。

　でも宿屋の番頭といふ者は、幾ら仕事に熱を入れたつて職業録にも載らないし、社會保障も何もなく、私なんかのやうに獨身の者が蓙碌したらそれでおしまひです。ただ頼むは主人對私の關係だけだ。私なんか、もうそろそろと、番頭稼業してゐては外聞が悪いことになるかもわからねえ。

このような次平に対して、全てを「身すぎ世すぎ」と、一種の諦観を持って処理していくのが、添乗員兼ラナーの万年学生の、通称「萬年さん」である。転勤のたびに通う大学を変えているこの男は、まさに文字通りの「駆けずり廻る（ランナー）」[注2]者である。いちおうは都内の案内係だが、門限内に宿に戻らぬ修学旅行生を探しに出たり、「變質な男學生」の要求をかわしたり、はては骨折した客のために貼り薬用のどじょうを調達してきたりと、八面六臂の活躍をしている。客に頼まれれば、踊り方を知らなくとも、レコードの音楽と「酋長の娘」の踊りとで、何とか

マンボを踊ってのける。これには、次平でさえ、「いくら身すぎ世すぎとはいつても、無茶だと思つたことでございます」と感じている。

このように、ひとくちに旅する者を受け入れる側の人間といっても、彼らは種々の様相を示すのである。次平のように、番頭気質の裏面に傷心を覚える者もあれば、次平のライヴァル兼先輩格の高沢のように、番頭らしさを次平に教える立場の者もある。また、添乗員という、番頭よりも足が地に着かない不安定な職業に、「身すぎ世すぎ」と唱えつつ、身を粉にして働くインテリもいる。「駅前旅館」には他にも数人の番頭仲間が登場するが、中心に描かれるのはこの三人である。作者によるその描き分けは、実に巧妙なものである。

さらに、旅する者を受け入れる側の人間である彼らが、旅に出る、という逆倒的な情況も二度描かれる。そして、そのどちらもが、女がらみの旅である。

それは、番頭仲間五人が寄って毎年春と秋に出る慰安旅行のことである。「五人のうち誰かが浮氣したやつが引受ける規約」になっていて、今まで「一年二回の旅行を缺か」したことがないという。常に誰かが浮気をするわけである。もともとそういう規約が存在しているからこそ、女がらみの旅となってくるのであろう。

「駅前旅館」に描かれる番頭たちの性格、女性関係を含む人間関係などを、実際の風俗の活写と見ることは可能であり、この慰安旅行の規約なども、番頭たちの世界では、ありふれた事かもしれない。が、作者は、〈活写〉という次元にとどまらないで、巧妙に筋を組んでいる。作品に描かれる二回の慰安旅行は、ともに次平に関する事柄に発端がある。そのことには、かなり重要な問題が潜んでいるように思われる。作品の構成にかかわる重要事項を見つけることができるのではあるまいか。それを明らかにするために、もうしばらく「駅前旅館」の内部を見てみよう。

最初は、お風呂で次平を抓った芸者に由来する慰安旅行である。女から誘いをかけられれば、すぐ燃え上がる性癖の次平は、この時も、「女にただ抓られたにすぎなくても、浮気したことにされるのが自分の氣持にぴったりしてゐるやうで満足でございました」と、慰安旅行の幹事を自ら引き受ける。

旅行先は、甲府の湯村温泉で、甲府は、その女が住んでいる所である。女は花柳界から足を洗って長野に行ってしまったということで、対面は成らず、次平は傷心の気持ちを味わう。が、湯村の宿の、なじみの女中ジュコさんの耳たぼの恰好が、芸者のそれにそっくりである、ということから、次平の頭には、芸者に関する昔の記憶がひらめく。昔、なじみの引手茶屋で、客に盗難の疑いをかけられ難儀していた豆女中を救ってやったことがあったが、芸者は、その少女だったのである。その縁を思い出した次平は、仲間に祝福され、きっかけとなったジュコさんともども手じめをし、慰安旅行はおひらきとなる。結局、この旅は、女に会いに、さらに女が誰であるかを思い出しに行った旅だといえるのである。

帰京した次平は、この芸者於菊から、山田紡績――ここの社長に彼女は身請けされている――の女工員連を率いて、次平の勤める楽元旅館に宿泊する、という連絡があったことに驚く。今度は、女を探しに行くのでなく、番頭然と女を受け入れるのである。

おりから団体客が次々に立て込んで多忙を極める次平は、それでも、やって来た於菊と共に過ごす時間を巧みに捻出し、跡つきあわせて互いの気持ちをそれとなく確かめるぐらいのことはする。「駅前旅館」の中盤は、次平の番頭手腕のあざやかさと、於菊相手のラヴ・ストーリーめいたエピソードが、交互に描かれている。

この恋愛沙汰も、仕事の上での出会いであることや、次平側の、よそに主ある女に手は出さないという番頭気質の不文律によって、決定的な事態にまでは進むことなく終わる。こういう面でも、次平の先輩格の高沢は、監督者であり忠告者である。

高沢は、やがて次平の見合旅行を計画し、見合とは艶福にあずかることだからというので、再び慰安旅行が計画される。しかも、その旅には、他の番頭仲間たちが、自分の女房でなく「色」を、それぞれ連れていくというのである。この発案をきっかけに、番頭仲間行きつけの小料理屋、辰巳屋のおかみが、おかみを常々気にかけていた高沢にではなく、次平にその思いを露わにする、ということが起こる。おかみは次平と旅行に出たがるのである。見合旅行は、次平たち二、三人が駅へ集合したところで中止となるが、次平とおかみはそのままある料亭へ流れてゆく。そこで次平は、「もう辰巳屋は、俺と殆ど出来てゐるも同然ではなからうか」という感慨を抱くに至る。

以上のように、次平の女性遍歴の話をたどってくると、それらは、実によく配慮がゆきとどいたつなぎ方がなされているのである。甲府に女を探しに行った後女がすぐ上京してきて、次平が番頭然とむかえる、というところなど、自ら旅をすることと、旅する者を受け入れることが、交互に描かれている。このような点に、先述したところの作者の構成の巧みさを認めることが可能なのではないだろうか。

作品「駅前旅館」は、その構成について論及されることが少ない。[注3] それは、次平が、身の上話を、〈聞き手〉に自由闊達に語っているという設定のためであろう。その自由さの中に、作者の構成面への配慮は見つけにくいのである。一見したところ、この作品は、一番頭の気ままなおしゃべりの聞き書きのように見える。

その〈聞き手〉の存在は、作品の結末に至って明瞭となるが、駅前の宿屋風景を教えてくれと次平に頼んだ人物である。が、実際、次平は、その注文をあまり気にかけず、於菊を追っていったこと、逆に於菊が上亭してきたこと、そして見合旅行や辰巳屋のおかみのことなど、「前後三回」も「くだらない身の上話」を繰り返してしまう。そのような自分の饒舌を次平が反省するくだりがあるが、聞き手は、次平のおしゃべりを容認している。

「驛前の宿屋風景を知りたい。思ひ浮ぶままに語つてくれ。くだらないと思つたことでも喋つてくれ。何も彼も繕はずに話してくれ。芝居や小説のやうに仕組まなくてもいい。在りのままに話してくれ」

右は、次平が語るところの、〈聞き手〉の注文である。これを見ると、いかにも、この作品が、誰か実在の番頭からの聞き書きそのもの、もしくはそれに近いものであり、〈聞き手〉が作者その人であるかのようである。

が、先述のように、「芝居や小説のやうに仕組ま」れていないという次平のおしゃべりは、実は、巧妙に筋組みが成されている。作者は、次平からも、また次平によって「貴方様」と呼ばれている聞き手からも、少し距離をおいた場所に居ると考えねばなるまい。作者は、次平――聞き手という設定の採用によって、次平のおしゃべりの闊達さを獲得しつつ、さらに番頭風俗の描写を超えて、次平に関するある何事かを表現すべく、構成面では充分な注意を払っている。

では、そのある何事とは、何であろうか。次平は、やはり旅館の住み込み女中であった継母の死から語り始めている。また幼ない次平が、女中たちからよからぬ影響を受けて育ってきたことも、その口から何度か語られている。彼は、女に関する彼なりの外傷体験（トラウマ）を持つ人物らしい。

そして、次平のおしゃべりの中で、多く語られるのは、女性関係である。作者が構成面において、最も注意を払っているのは、次平の女に関するエピソードのつなぎ合わせ方であって、そこに作者は旅する者を受け入れる側が旅に出るという情況の逆転を生かしている。

当初、次平は、番頭勤めという日常の立場にあって、旅という非日常的情況にある人々の生態を流し撮る立場に居る。が、次平――聞き手という設定の導入は次平の自由なおしゃべりを許し、やがて流し撮られている人々とともに、流し撮っている次平の人間が、徐々に浮き彫りにされてくる。番頭風俗、旅館風景の活写という次元から、この作品は、叙述が進むに従って、次平という一人の人間を描く物語に成長していっている。その物語は、最も複雑な人間関係である男女関係の深層にかかわる物語となってゆくのである。

作品「駅前旅館」の内部には、そのような風俗描写から、一人の人間の物語へという成長の過程がうかがえるのである。

二　「ある草案」（原型「駅前旅館」）

「駅前旅館」をよりよく知るために、ここで私は、原型「駅前旅館」ともいうべき作品「ある草案」について言及したい。「駅前旅館」連載開始の一か月前に発表された作品[注4]なのだが、その舞台は、やはり「柊元旅館」なのである。

主人公「私」の妻は、柊元旅館の女主人と懇意な仲である。ある日、ついでがあって立ち寄ったその旅館で、「私」は苦労人らしい中老の番頭を知る。そして「私」は、結局、その番頭の「話相手に對する殺し文句を心得てゐる」点に感心するのである。

題名から見ても、この小品は、「駅前旅館」の草案らしい。量的にずいぶんな差があるので、一概には二つの作品を比較できないが、登場する番頭の描かれ方に注意したい。

「ある草案」の番頭は「中老」の男で、生野次平は、その経歴から換算すると四十六、七歳である。[注5] 年齢的にそう差はない二人であるが、女性関係のエピソードがからまる次平の方が若く感じられるということはある。

むろん、「ある草案」には、番頭の客あしらいとその裏にほの見える彼の人柄というごとく表面的な面しかうち出されていないので、女性遍歴などの裏面の描写をその中に求めることは無理である。ゆえに、次平が若く見えるのは当然の事で、「ある草案」と「駅前旅館」とでは造型のされ方が異なる、ということではないだろう。

ただ、内幕を聞き手に語るという「駅前旅館」の設定によってはじめて、番頭気質の裏面が明らかとなっている、ということは、指摘できる。このこともまた、「駅前旅館」がよく巧まれたものであることを物語るものである。

三　「駅前旅館」周辺（「珍品堂主人」ほか）

「駅前旅館」の構成に重要な役割を果たしていた、旅する者を受け入れる側の人々が旅に出るという逆倒的要素は、同時期の作品にも何度か出てくる。

「珍品堂主人」の主人公も、もとは温泉旅館の支配人であり、客を受け入れる側の人間として働いていた。現在の生業、骨董屋稼業にスランプを感じ、のちスポンサーを定めて料亭の支配人となり、再び客を受け入れる側に立つ。かつては教職にもあったというこの男には、「駅前旅館」の万年さん、高沢、次平の三人の全ての面影がある。

彼は、食器や味噌の注文に自ら遠く旅に出る。実は、その旅は、ひそかな骨董漁りの旅でもある。やがてそのことが偶然にも発覚してしまい、帰った後にスポンサーに叱責される。客を受け入れる側が、自ら旅に出るという逆倒は、この作品にも生かされている。

そして、これも主人公の色気（ずばりそのものではないが）とかかわっているらしい。次平の於菊探しの旅と、珍品堂の骨董漁りの旅は、似通っている。次平にとっての〈女〉は、珍品堂にとっての〈骨董〉である。

徒し女は骨董と同じやうなものである。

珍品堂の思ひはもう美人部落のまだ見ぬ常夜燈に馳せてゐるのでした。

作者は番頭気質で粋付けされた「駅前旅館」の世界をさらに拡張したところに、珍品堂を泳がせているらしい。「珍品堂主人」で、作者は、はじめから珍品堂という一人の人間を丸彫りにしようとする企図を持っていたに違いない。「駅前旅館」の〈聞き手〉のような存在はこの作品にはない。風俗活写から一人の人間の物語へという小説の生成過程を「駅前旅館」ですでに体験した作者だからこそ〈聞き手〉の介在を必要としなかったのではないか。「珍品堂主人」は、次のような印象的な人間描写でしめくくられている。夏の暑さの中、毎日、街の骨董屋に出かけてゆく珍品堂の姿である。

例によつて、禿頭を隠すためにベレー帽をかぶり、風が吹かないのに風に吹かれてゐるやうな後姿に見えてゐるのを自分で感じてゐるのでした。先日、丸九さんからの手紙を見て、一年後には伊萬里なるものが實質的な相場になると豫想して、前祝に飲みすぎて腹を毀したのです。このところ、下痢のために少し衰弱してゐるのです。

論題が〈旅〉からいささかそれてしまったが、「駅前旅館」、「珍品堂主人」という、昭和三十一年から三十五年にかけての二大長篇に共通する類似のパターン――旅（客）を受け入れる側が旅に出る（客になりに行く）という逆倒――を確認しておきたい。

また、「珍品堂主人」の発表の一年前に発表された小品「リンダウの花」を見てみよう。

耳の聞えない、「聲も機械的にしか出せ」ないさよさんという美女が、知り合いの老嬢に伴われて、神経症のアレルギー疾患に悩む「私」の前に現われる。さよさんは御坂峠に「リンダウの花」を見に行きたい、と言う。

実はこの女性は、結婚して一週間もたたないうちに婿に逃げられている。婿は女を連れて河口湖畔に行っているという。峠には茶店があり、そこに宿泊したいが、そのためには紹介者が要るので、二人は「私」にその労を願い出てきたわけである。

美女を眺めた興奮から、その夜のアレルギー疾患は「猖獗を極め」る。朝ぼらけの中で、「私」は、さよさんを連れて御坂峠に居るものと「仮想」する。私は、さよさんのいう「リンダウの花」とは婿さんのことを指しているに違いないと考える。

さよさんを私が御坂峠に連れて行くというのも、また彼女を慰めるために、野球見物や大手町の瀬戸内ビルに連れて行く、というのも、すべては未発の行為で、とくに前者は「私」のまどろみの中の「仮想」である。

が、この「仮想」の旅は、いわば、女のためにする小旅行である。女のために男が旅をしてやる、というのは、「駅前旅館」でも次平と於菊との間に些細なエピソードとして生きていた。北海道のタコ部屋にいるらしい於菊の兄を探しに行く決心をした次平は、引手茶屋の客の一人、田様（たさま）に、したく金をカンパされるが、実は、田様の小切手は不渡りであって、その旅は中断となる。田様にかつがれたことを憤る次平は、於菊にまでかつがれたのではないか、と疑う。

於菊の兄が、北海道にいるというのは、本当の事で、のち次平は於菊への疑いを晴らす。

女のために計画された旅について、男が、気持ちをあれこれ動かす、という旅のパターンは、やはり時期的に近接した「リンダウの花」、「駅前旅館」に共通して存在している。

四　「駅前旅館」以前

「駅前旅館」、「リンダウの花」、「珍品堂主人」に見られる旅のモチーフ、旅を受け入れる者たちの旅、または女のためにする旅、という要素は、この五年間

だけに集中して見られるものだろうか、作品を溯って、旅のモチーフの系譜を追ってみたい。

旅を受け入れる側への作家の眼は、すでに昭和十五年あたりの作品にうかがえる。「掛持ち」、「へんろう宿」、「おこまさん」の三作品を見てみよう。

「掛持ち」では、甲府湯村の篠笹屋の下働き喜十さんが、休暇には伊豆海岸谷津温泉にある東洋亭の番頭をしている。職業の格は、双方でかなり違っている。二つの温泉宿に、掛持ちで仕事をしているわけである。ところが足かけ十年目、東洋亭で、篠笹屋で見た客に声をかけられてしまう。

掛持ちの生業という、尋常でない設定はともかく、この作品では、旅館に働く者と、その旅館の客との交渉が描かれている。しかも、喜十さんが掛持ちであることを発見する客というのが、眼鏡をかけ、「でっぷり太った」、「年齢は四十三歳、職業は文筆業」の「井能定二」という名の男であり、これは明らかに戯画化された作者の姿である。

このような、戯画化された作者が、旅を受け入れる側の人間とかかわる、というかたちは「おこまさん」にもある。ただし、「おこまさん」では、受け入れる側の人間は、番頭ではなく、観光地のバス会社の運転手とバス・ガールである。場所はやはり甲府、「東洋館」（「掛持ち」では伊豆の「東洋亭」）に宿泊している東京の小説家「井川櫪二」が地元の小さな「八號線バス會社」のために、名所案内の原稿を書いてやる。この井川は、「掛持ち」の井能よりも、さらに作者本人に近い。井伏の作品「琵琶塚」の名が、井川の作品として出ているぐらいである。

井川は、バス・ガールのおこまさんを、「君のやうな可愛らしい少女は、われわれ旅行してゐる者から云ふと、鄙にまれなる乙女といふのだ」とほめ、いたく気にいっており、案内文の考案のみならず、読み方の教授まで懇切丁寧にやってのける。

「ね、バス・ガール君。僕の書いたあの名所案内の文章、自分でも上出來だとは思はないが、そんなに惡いとも思はないんだ。君があの説明案内をやるやうになつたら、僕に手紙をくれたまへ、見に來るからね。君のバスに乘つて拜聽するからね。」

井川は、会社からの安原稿料をいっこうに気にかけず、「俺は安原稿料には慣れてるんだ、今夜も明日も安原稿を書くんだ、身すぎ世すぎだね」と達観を述べるが、なぜ、彼はそうまで、おこまさんとバス会社に肩入れするのか。それには、井川の色気も多分に働いているらしく、いざ名所案内が無事に始められると、「井川はうつとりしておこまさんの可愛らしい顔を見つめてゐた」とある。

彼女から知らせを受けて、二度も東京から甲府へ案内を聞きに来るのも、〈女のためにする旅〉である。

「へんろう宿」は、やはり、宿の女主人という、旅を受け入れる側の人間を照射しながらも、先の二作品とはかなり異なる情況が提示されている。お遍路さんが捨てていった女子ばかりが代々ひきついでいるみすぼらしい宿屋の薄い蒲団にくるまりながら、客と、あるじのお婆さんの話を、「私」は聞くともなく耳にする。「その宿の横手の砂地には、濱木綿が幾株も生えてゐた。黑い濱砂と、濱木綿の緑色との對象が格別であつた」と結ばれたこの作品には、「おこまさん」などにみられるような、自己を戯画化してユーモラスに、旅を受け入れる側の人間とかかわらせるような余裕ある態度よりはもっと深切な問題が含まれているように思われる。

いずれにせよ、これら昭和十五年に次々に発表された三作品においては、旅を受け入れる側の人間が照射されているのである。

井伏作品にみられる庶民の〈旅〉を追っていくうえで、資料として欠かせないのが初期の「集金旅行」（昭和十年～十二年）である。昭和十五年の三作品が、いずれも〈旅〉を受け入れる側の人間を写し出し、そこに彼らとかかわる戯画化された作者もしくは、「私」を配していたのに比して、この作品は、旅する「私」が中心として描かれている。この旅行は、もともと部屋代を踏み倒してアパートから去った者のもとへ、アパートの一住人である「私」が、集金に出かける、という、人のためにする旅である。「リンダウの花」における旅に似た趣きを持つ。

また、この旅が「女」とかかわる旅である点は、「駅前旅館」の旅と似ている。「私」の旅には、昔の愛人たちから慰藉料を請求するという目的で、同じアパートのコマツさんという年増美人がついてくる。「私」は、旅という非日常的な情況の上で、この女を眺めることになる。

作品の結末で、ある男の家に腰を落ちつけてしまい、もう旅は続けないという伝言をよこしたコマツさんに、「私」はいたく腹を立てる。おそらく、「私」はコマツさんの慰藉料請求の手腕、しつこい男のやりすごし方など、コマツさんの異性関係を傍観者的に見てゆくうち、傍観者が傍観者でなくなっていって、コマツさんにある特別な感情を抱き始めたのではないか。

旅の上でのこのような男女のかかわり方は、「駅前旅館」の、次平と辰巳屋のおかみのかかわり方と同じである。高沢と辰巳屋の関係に対して、次平は従来、傍観者であったが、慰安旅行の計画を契機として、今度は次平がおかみとかかわってゆくのである。

「集金旅行」は、いわば旅する者を描く小説であるのだが、その中にも、女中、番頭、車引きに注目する「私」の眼が働いている。たとえば、「私」は、福岡で次のような感想を抱く。

……（前略）……女中のしゃべるこの土地の言葉づかいは、ふつくらとした感じで風貌も大きく、ひとかどの風情があった。

旅する者を専一に描いたかのような「集金旅行」にも、旅を受け入れる側への眼は働いてきている。

昭和二十三年に発表された「貸間あり」は、そのテーマが直接〈旅〉とかかわる小説ではない。が、ユミ子がお嬢様、千代が女中を装って千代の故郷に帰る、という、人のためにする旅行の計画があり、また、五郎と江藤の受験旅行、五郎の番頭就職の話など、それまでの作品に提出された〈旅〉のモチーフが生きている。

五　昭和三十一年から三十五年の〈旅〉

前章まで、概略的に、井伏の作品における〈旅〉をたどってきた。それでは、「駅前旅館」周辺の作品は、その系譜の中に、どのように位置付けられるであろうか。ここで、まとめてみたい。

簡単に言えば、〈旅を受け入れる立場にある人々〉を主体として描いた、「掛持ち」、「おこまさん」、「へんろう宿」などの作品系列と、〈旅する者〉（しかも目的や要因が明確な旅）を描いた「集金旅行」系列が、「駅前旅館」で合流しているのではないか、ということである。しかも、年次が下るにしたがって、旅を受け入れる側の人間とかかわっていた、戯画化された作者や「私」の存在は次第に稀薄になりつつある。

「私」を直接かかわらせずに、〈旅を受け入れる側〉を描く試みが成功したその上で、それらの人々に〈旅する者〉を重ねあわせるという試みが成されたわけである。

「掛持ち」、「おこまさん」系列の作品には、必ず「私」ないしは「井能定二」流の人間が存在していた。それらは、いわば〈旅する者〉であるのだが、作者とかなり密接な関係にある点において、〈旅する庶民〉ではない。この作品系列において、庶民は、番頭、バス・ガールなど、旅を受け入れる側、つまり作者にとっては向こう側の人間なのである。

いっぽう、「集金旅行」、「貸間あり」に登場する〈旅する庶民〉は、〈旅する者〉としての作者が仮託された井能定二などの人物とは、かなり性格が異なる。前者は、現実の中から拾われて作品の中に形象化されたような人々である。このことは、たとえば、「集金旅行」の主人公「私」と比較してみてもわかる。「集金旅行」の「私」は、亡くなったアパートの主人の遺児、勇太のために旅行を計画する「私たち」の一人、庶民の一人なのである。

この、〈旅を受け入れる庶民〉と、〈旅する〉庶民というモチーフは、「駅前旅館」や「珍品堂主人」にみられる、旅を受け入れる側が旅に出るという、番頭や料亭の雇われ支配人の裏面を描出することによって、巧妙に合体させられる。その描出において、作者はその姿を徐々に作品から消してゆき、直接的には彼らとかかわらなくなる。

また、「リンダウの花」の「私」は、「人のためにする旅」というモチーフの存続から考えれば、「おこまさん」の井川権二からそう遠くない位置にいるが、「私」は〈旅〉を仮想するだけで、実現させはしない。作品内で、〈旅〉のモチーフの重みは、軽微なので、特にここで問題として扱わない。いわば、「リンダウの花」は、「駅前旅館」、「珍品堂主人」にはあまり含ませることができなかった〈人のためにする旅〉というモチーフが、「仮想」というかたちで美しくふくらませられた小品だと言える。

＊　＊

以上のように、〈旅〉の描かれ様から見てゆけば、「駅前旅館」周辺の作品においては、従来の井伏作品の〈旅〉のモチーフを統合する試みが成されていると言える。小論においては〈旅〉のパターンを追って、その描かれ方をまとめただけに終わってしまったが、その描かれ方の変化によって、何を浮き上がらせているか、については、まだまだ考究が浅い。今後の課題として、なおも考えてゆきたい。

最後に、作家自身が描かれた紀行文、随筆について考察してみよう。

紀行文や随筆における作家の語り口は、比較的淡々としている。作家自身が人のために旅をするとか、女とかかわる旅をするとかいう情況は、まず見られないので、その点では小説のモチーフの由来を探ることはできない。

が、旅にある自己を戯画化して描くことは、昭和二十二年ごろの随筆に幾度か見られる。「妙な一言居士の釣師姿のおやぢ」（「手紙のこと」）とか、「自稱釣名人」（「鮠つり」）などの自称が散在している。

また、作家が、番頭、女中などに積極的にかかわっていくことが多い。

「君は、すぐ女中部屋に目をつけるね。青写真を見ても、いきなり君が目をつけるのは女中部屋だ。」

右は「神近市子女史」（昭和二十五年六月）にある、水上温泉での、阿部真之助氏の毒舌である。

私は不意を喰らつた。

「いや、そんなわけぢやないんです。僕は設計家の、現實的なところを指摘してゐるんです。これで見ると、この女中部屋に寢る女中たちは、朝陽がまぶしくつて、朝寢が出來ないわけですからね。問題は、東側についてゐるこの窓です。」

毒舌に対する井伏氏の弁解である。

このような暖かい眼は、長きにわたって、井伏氏の紀行文や随筆を特徴づけるものとなっているが、やはり虚構の世界でこそ、その眼がとらえたところの〈旅を受け入れる側〉の人々が大きく写し出されているものと考えられる。

〔本文の引用は全て筑摩書房版『井伏鱒二全集』によった。〕

注1、「井伏鱒二〈作家と作品〉」（昭和四十二年五月、集英社発行『日本文学全集41井伏鱒二集』所収。引用は昭和五十二年十一月、有精堂、日本文学研究資料叢書『井伏鱒二・深沢七郎』所収のものによった。）

注2、「駅前旅館」本文に次のようにある。「これは餘談ですが、ラナーとは英語のランナーの詰まつたもので、駈けずり廻るからこの言葉が出たと申します。」

注3、例えば、昭和三十二年十一月『群像』掲載の「創作月評『駅前旅館』」で、本多秋五氏は、作者の意図を「もつといろんなものを取り合せて、旅館業者からみた當世風俗を書くつもりであつた」と推測し、作品における「ディテール」の「つみ重ね」のおもしろさを評価し、「それほど全體の構成をうるさく言うには當らない」と述べている。

注4、『文芸春秋』に昭和三十一年八月に発表された。

注5、春木屋の中番を十七歳から八年間つとめ、そして籾山旅館の下帳場に入って七年目に本帳場にまわされる。のち三年間は主人代理、そののち足かけ三年は空襲で焼け出されて郷里の能登に滞在する。上京して柊元旅館の本帳場に坐ることとなるが、それから足かけ九年になる。以上を合計すると次平の年齢は、ほぼ四十七歳になる。

（昭和五十七年三月稿）